
FateでIS

武器屋の店員 A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t eでIS

【Nコード】

N5074Z

【作者名】

武器屋の店員A

【あらすじ】

基本的に物凄くやる気の無い…というか、人としてどこか壊れている主人公が、死ぬ 能力ゲット 転生という流れで、F a t eに登場する能力をぶら下げてIS インフィニット・ストラトス の世界へ行く話。

作者はISの原作を読んでいません。知識や解釈の誤りはハートとガッツと下ネタでカバーします。というかF a t eの方が好きです。

0 (前書き)

描写？へったくそですけど？

文章力？10年前に捨てましたけど？

side:???

すぐ近くから悲鳴が聞こえる。

誰の？

分からない。

ぼんやりと空を見上げる。

見上げる？

いや、俺は前を向いているはず。

ああ、仰向けになっているのか。

軽く息を吸う。

肺の中をガスの臭いが満たした。

近くに車でもあるのか？

視線を横にずらす。

眼に入るのは、鮮烈な赤。

なんだこれ。

ああ、俺の血か。

きつたねえなあ……。

side out

side:神

さーて、困った。

目の前で煌々と燃え上がり、もはやダークマターと化した書類を見て、何度目か分からない溜め息をつく。

「ハア……どーしよっかなー……」

……ん？ あ、どーもみなさんこんにちは。え？ ボクですか？

ボクは神です。っていうか上に書いてあるじゃないですか。神ってそれくらい知っておいてくださいよ。

……え？ 知ってる？ あっそ。

っていうかちよっと聞いてくださいよ。実はボク、今ひじょーに困ってるんです。

ついさつき書類が燃えたんですけどね、その書類っていうのが『1人の人間の人生』が記された書類なんですよ。それが燃えるってい

う事は、即ち『死』を意味するんですけど、まあつまるところ、とある人間がさつき死んだんですよ。……え？　その何が問題なのかって？

いや、ただ死んだだけならいいんですよ。問題なのは、その人間の寿命が70年近く残ってることなんですよねー。

「ほんっと、なんで死んだんだよ……」

この時、ボクは目の前の処理に気を取られたせいで、あることに気が付かなかつた。

実は書類は2枚重なっている状態で、燃えたのも当然2枚だったということに。

……つるさいな！ 神様だって全能じゃないんだよ！

s i d e
o u t

0 (後書き)

黒髪っていいよね。

1 (前書き)

ただ助けを待っただけなのか？ただ流されるだけなのか？

じゃあお前は一体何のために生まれてきたんだ？何をして生きて証を刻むんだ？

何かを為す自信が無いのか？何もしないまま終わるのか？分からないまま、答えられないまま終わるのか？

ただ待つてるだけじゃ始まらない。ただヒーローを待っただけじゃ何も変わらない。今を変える方法は1つ。

他の誰でも無い、お前がヒーローになるんだ。

アンパンマン

何も無い、ただ限りなく白が広がる空間。

そこに立つ1人の少年と1人の子供。

少年の方は学生服に身を包み、その眼はどこか虚ろで、見ていると吸い込まれそうになる。きっと変わらない吸引力を誇るに違いない。

対して子どもの方は、『NIKE』と書かれたジャージを着ている。無論、上下セットだ。ちなみにオレンジ色である。

以下、子どもをNIKE、少年をダイソンとする。

NIKEがダイソンを上から下までじつくりと眺め、口を開いた。

「えーっと、ヤマダ コウスケ山田幸助くんだよな？」

山田幸助と呼ばれた学生服の少年　ダイソンは、NIKEの問いに対し、まったくの無表情で返す。

「はい」

……二人の間に生温い沈黙が流れる。

先にギブアップしたのはNIKEだった。

「あ、あのさ、やけに反応薄いね」

「ええ、まあ」

……再び沈黙が支配する。

「えーっと、TPPって何の略か知ってるかな？」

「ちん っぱ」

……。

「あー、そのー、とりあえず現状を伝えるけどね？ ボクは神様で、キミはもう死んじゃったんだよ」

「そうですか」

自身の正体と、相手の状態を明かしたにもかかわらず、それでも一向に表情を崩さず、平淡な声色で返し続けるダイソンに、NIKEはどこか恐怖にも似たものを感じていた。

(なにこの人間。正直気持ち悪いんだけど。っていつかここまで会話のキャッチボールが成り立たないなんて……)

しかし、このままというわけにもいかない。

NIKEは気を取り直し、再び言葉を投げかける。

「た、確かにキミは死んだんだけどね？ 人間には押し並べて『天寿』っていうものがあるんだ。でもキミの場合、その天寿を全うする前に死んじゃったんだよね」

しかし、

「へえー」

ダイソンはNIKEからのボールを全力で地面に叩き付ける。フォークなどというレベルではない。キャッチボール？ 何それ？ 的な状態どころではない。

引きつった表情を浮かべながらも、NIKEは必死に食い下がる。

「キミが死んだ年齢は16歳。でもキミの本来の寿命は88歳。つまり、キミには最低でもあと72年は生きてもらわないといけないんだ」

「……なんですか？」

！！

ここにきてようやくダイソンが反応を示した。思わず感嘆符を使うくらいびっくりである。

NIKEは密かに達成感に浸りながら、ダイソンの放った問いにたいして返答する。

「いや、なんでって言われても……。ルールだからとしか言いようがないなあ」

「誰がどのような理由の下で定めたのかも分からないようなルールに従えと言っのか？」

突如として早口で饒舌にまくしたてるダイソン。一体どうしたというのだ。

「えっ、いや、だか」「ふん、馬鹿馬鹿しい。結局神といえど、他人が勝手に作ったわけのわからないルール1つままならんとはな。そうやって自分が何のために何をしているのかも分からないまま朽ちていくがいいさ」

さらに口を高速で回転させるダイソン。傍から見れば、高校生が小学生をいじめているようにしか見えない。

「大体、俺は死んだのならそれはそれで構わん。さっさと地獄なり地獄なり、どこへでも連れて行け」

なぜ行き先が地獄一択なのだろうか。というか登場から1話も経っていないにもかかわらず、早速キャラ崩壊を起こしている。

NIKEはダイソンの剣幕に、若干涙目になりながらも声を張り上げる。

「だから！　そういうわけにはいかないんだよ！　キミは最低72年は生きなくちゃいけないの！　その後は好きにしていからさあ！」

「黙れ。面倒だ」

「生きるのがめんどろってどういうこと！？　っていつかキミの死因からして意味不明だよ！　なんなんだよ！　」気が付いたら車道にいて、気が付いたら車にはねられる』って！　そんな投げやりな死因初めて聞いたよ！」

「そうか。奇遇だな。俺もだ」

「うがあああつ！ なにコイツ本当にめんどくさい！ ねえもう頼むから早く転生してよ！ 転生後の世界もステータスも決めさせてあげるからさあ！」

「おーこーとわーりしますー。おーこーとわーりします断固」

「そんな微妙にマニアックな曲よく知ってるね！ 正直『だが断る！』って来ると思ってたよ！ っていうか断らないですよ！」

「おーこーとわーりーしーまーすー。ご遠慮しますー」

その後もひと悶着あり、なんとかダイソンの説得に成功するNIKE E。

ちなみにこの間、ずっとダイソンは無表情を崩すことは無かった。

さて、気を取り直して

「……………それで？ キミはどんな能力が欲しいの？」

N I K Eは顔面の筋肉全てで疲労を表現しながら訊ねる。

対するダイソンは相も変わらず無表情だ。

「あ？ ああ、別になくてもいいかなー」

「いや、キミは何の能力も無い状態で行ったら『つまらん。飽きた。死のう』とか言って自殺しそうじゃん。一応ボクからも妨害はするけどさ、それじゃあ意味が無いんだよね」

なんと鋭い洞察力であろうか。さすがは神。

N I K Eの言葉に、ダイソンは何やら思案するように顎に手を当て、

「……………そうだなー……………じゃあさ、F a t eのバーサーカーとアーチャーのスペックが欲しい」

「スペック？ まあ良く分からないけど分かったよ」

「あ、ちなみに4次と5次両方で頼む。一回やってみたかったんだよねー。ゲートオブバピロン、みたいなの……………ってちょっと待った」

ダイソンはN I K Eにそう言うと、1人思考に陥った。

（4次と5次って言ったけど本当に両方いるのか？ 剣製が出来ればバピロンいらなくね？ 役割かぶってね？ いやでも待てよそもそもバピロンは発動者の保有する財によって威力は変わるわけだから俺が使っても意味が無いのかいやそうとは限らないスペックの中に財が入っていれば十分運用可能だむしろ剣製の方が心配だな剣製はアー

チャーの知識と記憶があればこそ可能なのであって俺なんかが技術だけ持っても仕方が無いしつまりギル様の財があれば万事解決か？……うん)

わずか1秒程で思考を切り上げ、NIKEに向き直るダイソン。なるほど、確かに気持ち悪い。

「とりあえず、さっき言ったスペックの中にエミヤの持つ知識とギルガメッシュの財、この両方を含めてくれ」

「??? あー、うん。了解」

NIKEは頷きつつも、実際にはよく理解していなかった。子どもには早かったようだ。

「えっと、それじゃあ転生する世界は、そのFate?の世界でいいの?」

しかし、そこで肯かないのがダイソンである。

「いや、アニメとか漫画の世界に行けるっていうなら、ISの世界に行きたい」

「……アイエス?」

「インフィニット・ストラトスだよバカ」

1 (後書き)

筋肉筋肉

2 (前書き)

私は知っている。世の儂さを。
私は知っている。限りなき苦しみを。
私は知っている。"力"の行く末を。
私は知っている。私の人気を。

モッピ―

「おい！ パスしろよ！」

ボールが規則的に跳ねる音と、室内シューズと床の摩擦音が耳に鬱陶しくまとわりつく。

「おい、デュエルしろよ！」

「うつせー蟹！」

ああ、本当に五月蠅い。

”私”は伏せていた顔を徐ろに上げた。

眼前に広がるのは、運動部が調子に乗る暑苦しい光景。

今は体育の時間。種目はバスケット。場所は某中学校の体育館。本来なら別々の場所でスポーツに興じるはずのこの時間。しかし今日は珍しい事に、男女の場所が偶然重なったのだ。

ちなみに私は隅っこで体育座りをしている。

何故か。答えは簡単。仮病を使って見学にしたのだ。

具体的には、

「安西先生、バスケットかだるいです」

「じゃあ八神さんは見学だね」

といったやりとりが先程なされた。

と言っても、別に本当にバスケットがダルかったわけでは……うん。やっぱりダルかったわ。

ってそうじゃなくて、体育を見学しているのにはそれなりの理由がある。

その理由とは、即ち私のチート能力である。

私が参加すると、それは最早スポーツではなく、一方的な蹂躪となるのだ。

故に、私は見学に徹している。

ピッ！

甲高い笛が鳴り、コートに入っていたクラスメイト達と、脇に待機していたクラスメイト達が入れ替わる。

私はそれをぼんやりと眺めながら、特に何も考えていなかった。

すると不意に、私の前に人の気配が現れた。

「ユウはまた見学？」

そうやって私に声をかけてきたのは、クラスメイトA。

名前は……なんだっけ？

「うーん、参加したいんだけど……。ほら、私が参加したらさ……」

「まあ確かに、ユウが入ったチームは絶対に負けなくなるもんね」

私の身体能力についてはクラスの誰もが知ることである。なので、今となつては体育不参加の私を咎める者は一部の例外を除いて殆どいない。

そう。一部を除いては。

「ちょっとユウ！ サボってないで入りなさい！」

再び私を呼ぶ声がある。地平線の彼方から、ビックバンの彼方から、私を呼んでる声がある。

あー、めんどくさい。

「いや、でもm」でもモテモクラシーも無い！ いいからそっちのチームに入って！」

私が断ろうと声を上げるも、それを遮る甲高い声が体育館に木霊する。

その声の主とは……

「鳳^{フヤン}さんも懲りないねえ」

誰かが呟いたがその通り。一部の例外にして声の主とは鳳^{フヤン}鈴音^{リンイン}その人である。

こげ茶髪、ツインテール、黄色いリボン、低身長、ちっぱい。

このくらい特徴を挙げれば十分だろう。

彼女には何故か毎度の如く目の敵にされている。

いや、目の敵というより、ことあるごとに突っかかってくるのだ。

私が何をした。

「……はあ。仕方が無い」

私は嘆息し、犬歯をむき出して威嚇しているお姫様のもとへとただらと歩を進み「なにしてるのよ！早く来なさい！」駆け足で向かった。

さて、遅くなったが、物語の開始を告げよう。

この物語は、かつては山田幸助（）、今は八神 優（）である私が、主人公、織斑一夏を殴っ血KILL物語である。

2 (後書き)

あー、ホント分かりにくいなー。

主人公の紹介　↳本当はこんな章、作りたくなかったよ（前書き）

主人公の紹介です。かなりのクズなので、読者に嫌われること間違いないし。

主人公の紹介　↳本当はこんな章、作りたくなかったよ

名前：八神優ヤガミ ユウ

性別：女

年齢：現時点で13才（リン、一夏と同じ学校）

容姿：

腰まで伸びた黒髪に、同色の虹彩。
身長は一夏よりも若干低い程度。

スタイルはそれなりに良く、何がとは言わないが、大きめである。
神から押し切られる形で貰った能力を使用すると、虹彩が赤色に染まる。

最初は「厨二っぽい！　かけー！」と、テンションが立ち上がり
「ヨだったが、2回目に気付いた時はすでに冷めていたのか、特に
何のリアクションも示さなかった。

性格：

天の邪鬼。それでいて面倒くさがり。

綺麗な言い方をするならば、『あまり出しゃばらず、どちらかと言うと控えめ。能力の関係上、自分が何かをすると既に結果が決まってしまう（例えば体育では無双してしまう）ので、極力何もしないようにしている。しかしそんな中にもしっかりと芯を持っており、他人や周囲に流されるのを嫌う』といったところ。

一応外面はいいようで、キャラもがつり作りこんでいる。

本人は愛想笑いとポーカークフェイスに絶対の自信を持っており、曰く、それが対人関係において最大の潤滑剤であるとのこと。

好き：音楽鑑賞（V系と電波ソング）

嫌い：虫、他人、自分、鈍感主人公、努力、人の多い場所、流行

能力：

エミヤ、我様、巨人、甲冑の能力を持つ。

具体的には

- ・ 投影魔術
 - ・ 無限の剣製
 - ・ 王の財宝
 - ・ 武芸百般をこなすセンスと身体能力
 - ・ アーサー王をも凌ぐ剣術
 - ・ 拾った武器でも宝具クラスで扱える能力
- e t c . . .

しかし、渡すべき能力の取捨選択が出来なかった神のせいで、本来はあまり必要の無い余計なものまで付いてきている。

- ・ 赤い弓兵の家事、主人公スキル（朴念仁的なアレも含む）
 - ・ 黒いデカブツの履かないスキル（基本的には家では履いてない）
 - ・ 金ぴかA U Oの慢心スキル（慢心せずして何が王か！）
 - ・ 基本的に自分を責め、他人に許されると不安になる（何故罰さないのでするか！）
 - ・ 単独行動⇨協調性の無さ（何者にも縛られない俺、マジカッコイ）
- e t c . . .

その他：

自殺が出来ない。事故死もしない。最低72年間生きることが既に決まっている。

こんなもんかな？ あとから追加するかもしれないです。

主人公の紹介　↳本当はこんな章、作りたくなかったよ（後書き）

I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .

私は剣の骨です。

3 (前書き)

何と言われたって、それがどうしたと。

誇れるものがあるなら、どんなもんだと。

前を向いて、僕は僕なんだと、胸を張り続けるんだ。

そうしていれば、君は1人だって大丈夫。

僕が居なくても、君は未来へ歩いて行ける。

ドラえもん (旧)

時は遡り、入学式

まだ少し肌寒いこの季節。風に舞う桜の花びらを視線で追いながら、新たな学び舎となる場所へと足を踏み入れる。

俺が私となつて、12年が過ぎた。

最初こそあの糞餓鬼（自称神）を再起不能に追い込んでやろうと思つていたが、今となつては八神優である事にすっかり慣れていた。

と言つても、自分が女であることや、八神優という者の存在を肯定するつもりは毛頭ない。

『慣れた』というのは、『八神優というキャラクターを演じる事に慣れた』という話だ。

がらんどうな俺を覆うハリボテ、それが私。そう割り切ることで、私はまだ俺でいられる。

「あつ、ユウ！ おはよう！」

誰かが手を振りながら、こちらに近づいてくる。誰だあいつ。確か小学校の頃にも見たことがあるような気がしなくもない。相手の態度から察するに、自分と彼女は知り合いなのだろう。

「うん。おはよう」

顔の筋肉を動かし、柔らかい微笑みを形作る。ラグもムラも作るな。無理にでも自然な笑みを作れ。

今の私は八神優だ。

「もうクラス表って見たの？」

彼女……仮にAとする。Aは私の顔を覗き込むようにして訊ねてくる。ちょ、顔近い。邪魔。

「ううん、まだ見てないよ。そういえばクラス表ってどこにあるの？」

完璧な切り返しだ。さすが私。

そしてこの後の流れも容易に想像できる。というかそういう展開に持っていくための私のセリフなのだから。

ずばりその展開とは、これから一緒に見に行く。或いは張り出されている場所まで案内してもらえるに違いな「それがアタシも分からないんだよね」

なんだと？

「ユウなら知ってると思ったんだけど……うーん、どうしよう？」

Aはへらへらと軽く笑いながら頭を掻く。……ふう、少し落ちつけ。私は今、八神優だ。ならば完璧であれ。

内心でAに役立たずの烙印を全力で叩きつけ、先程と変わらぬ完璧な笑みを浮かべる。

そして私はこの状況を打開すべく、ある提案を掲げた。その打開策とは……

「じゃあさ、あそこにいる人に聞いてみようよ」

そう。他力本願である。何か文句でもあるか？

余談だが、他力本願とは本来、仏教用語で『阿弥陀如来の本願力による浄土往生』を指す。平たく言えば、『自力で極楽に行けるなど思い上がりも甚だしいわ！』ということである。つまり、他人に頼りきり、主体性が欠如している状態を指すのは厳密には誤りである。

さらに余談だが、この『余談だが』という解説文は遼ちゃんがよく使うものである。遼ちゃんが誰か分からない人は、歴史好きなお祖母ちゃんにでも聞いてみよう。

閑話休題

私が指をさした先　そこには1人の男子生徒の背中がある。

その男子生徒は、どうやら入学案内のプリントを読んでいるようだ。きつとそこに校舎の見取り図的なものがあるに違いない。いや、あったらいいね。

分かりきっていることだが、私達2人はそのプリントを持ってきていない。私に関して言えば紙飛行機にして窓から飛ばした。ホントに何をしているんだ私は。AUOの慢心スキルでもうつったか？
……いや、関係無いか。

私はAを連れ、その男子生徒の元へと歩み寄った。

「あの、すいません。ちょっといいですか？」

少しどころか案内までさせるつもりだけだな。

私はそんな内心は一切外には出さず、男子生徒の返事を待った。

この時、私は何故この男子生徒に声を掛けてしまったのだろうか。

元男であることが原因で、無意識のうちに男の方が話しかけやすいと思ってしまうたのかもしれない。もしくは、それこそ慢心していたのかもしれない。慢心と言うより、油断、平和ボケと言った方が適切か。或いは忘却か。

私はこの時まですっかり、この世界が何なのかということを手を失念していたのだ。

いずれにせよ、私はこの選択を……ひいては、この先怒るであろう未来、そしてそれに自分が関わってしまうという事を激しく後悔するはめになる。

私の声に気付いたその男子生徒が、ゆっくりと振り返る。

「ん？ どうしたんだ？」

そうやってニコリと厭味の無い笑顔を魅せる男子生徒。 対照的に、私の笑顔は凍りつく。

忘れてた

やっちゃまった

Oh . . .

様々な言葉が脳内を飛び交う。だが待て八神優。フリーズしている場合じゃない。私は八神優なのだから、この程度で動じるわけにはいかない。

「実はクラス表がどこに貼り出されているのか分からなくて……」

脳から指示を出し、口を動かし、言葉を紡ぐ。それだけの動作がひどく困難に感じる。

「だったら一緒に行こうぜ？ 俺もちょうど行くところだからさ」

「ホント！？ ありがとうー！」

隣にいるAが、やたらと高いテンションで了承する。そりゃあ、運よくイケメンが引つ掛かったんだから、テンションも上がるか。

私は2人と共に、校舎の中へ入っていく。

これが私と、この世界の主人公 織斑一夏とのファーストコンタクトである。

3 (後書き)

あつたまてつかてーか
さえーてぴっかぴーか
そーれがどうした
ぼくドラえもん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5074z/>

FateでIS

2011年12月19日01時52分発行